

## 外国人にことばを教える

高 井 收

### 1. はじめに

これは平成6年10月21日小樽商科大学言語センター主催の公開講座「外国語としての日本語——日本語教師を目指す人のために——」で話された内容をまとめたものである。

まず言葉を教える上で考えなければならないことは次の3点である。それは誰に、何を、如何に教えるかである。しかし、誰に、何を教えるのかをはっきりと決めておかなければ如何に教えるかは決まらない。

表題にあるように「外国人に教える」では答えにならない。日本語を教える場合なら、その外国人がどのような目的で日本語を学習しようとしているのか、母語は何語であるのか、どのような学習環境にいるのか、例えば母国に居るのか日本にいるのかを知らなければならない。学習者の目的、母語、学習環境によって教え方に大きな影響を与えるからである。

### 2. ことばを教えるとは

外国人にことばを教えるとはどういうことなのだろうか。日本語ならば、その何を教えるのが問題となる。日本語に限らず外国語の学習目的をその言語を用いて他の人と意志疎通する能力を修得することとすれば、その言語の音声、音韻、アクセント、語彙、文法、文字の表記法などの規則と、それに従って話したり、書いたり、理解したりすること、すなわち運用の仕方を教えないければ言語は使えない。それゆえに、日本語教育でも教えないければならないのはその規則と運用である。母語については意識せずに規則を習得し、それに従った運用ができるが、外国語の場合にはなかなかそうはいかない。日本語の環境で生まれ育った人達にとっては母語である日本語が、外国語の環境で生まれ育った人達にとっては外国語であるという至極当然のことが、日本語教育と国語教育において最も基本的で決定的な違いである。

### 3. 母語の習得過程

幼児は知能や聴覚・発声器官の発達にともない日常生活の中で言葉を習得する。学齢に達する頃にはその音声言語が母語として身についたものになり、学校教育の過程において文字言語を修得しながら様々な文体を身につけてゆく。

母語習得では音声言語を耳で理解することから始まる沈黙の期間を経て、生後2、3カ月位まで「アー」とか「ウー」という意味不明瞭な喃語の時期が続く。そして、およそ満1歳位から1語でまとまった意味を表す1語発話に始まり、2語発話、3語以上からなる発話という順序で話すようになり、5歳位で基本的な統語構造をだいたい習得する(伊藤・1990年)。

### 4. 外国語(第2言語)学習の特徴

外国語の学習は普通母語を身につけた後、あるいはその過程において始められるので母語の影響を受ける。外国語を学ぶのに助けとなる影響を正の転移と言い、妨げになるそれを負の転移と

いう。成人ならば抽象的な文法概念も扱うことができ、言語を分析し整理することにより文法規則を習得して言語運用に適用することができる。一方知能の発達した成人がごく単純な意味内容のみ扱う初歩の表現形式から学習を始めなければならないことから、学習についての欲求不満が生じる場合がある。

## 5. 外国語（第2言語）教授理論

外国語（第2言語）教授法が今日のように議論されるのは19世紀に入って伝統的な文法訳読式授業の反省に端を発する。教授法とは「教えるための理論化され、体系化された方法（伊藤・1992年）」であり、理論または仮説に基づいて指導目標が設定され、教材が選択され、指導手順が考案される。しかし、現実には様々な学習者がいて様々な学習環境が考えられるので、一つの教授法によって全員が教えられるものではない。それぞれの教師の工夫と常識に依存する技能の側面が多い。

日本に影響を与えた教授法はその前提となる理論または仮説により次の3期に分類される。第1期は1950年代に盛んとなったオーラル・アプローチであり音声言語重視の教授法である。第2期は1960年代より始まった、認知心理学の考え方を基礎としたコグニティブ・アプローチである。そして第3期は1980年代より盛んになった言語運用重視のコミュニカティブ・アプローチである。

第1期のオーラル・アプローチはアメリカの構造言語学者であるフリーズが提唱し、別名オーディオリンガル・メソッドとも呼ばれる。この教授法を支える学習理論はワトソンやスキナー等の行動心理学に基づくものであり、図1に示されているように入力（言語）刺激が望ましいと思われるある特定の（言語）反応と結びついたとき、そこに学習が成立したと考える条件反射の原理をその理論的基盤においている。人間の頭の中は観察できるものではなく理論的考察の対象外としてブラックボックスであり、言語体系は刺激と反応の連合による習慣形成の過程において修得されると考えられた。

図1 行動心理学の学習モデル

刺激 (Stimulus) → 人間の脳 (Black Box) → 反応 (Response)

正確な言語形式の修得を目標としたこの教授法では文型練習・模倣暗記学習が用いられる。その指導技術の1つに文を後ろから積み上げる方式で模倣・暗記の学習方法がある。最初対話全体を状況設定の上で1, 2回聞かせる。次に新出語の発音を教え、最初の文の終わりの部分を模倣反復させ、そのすぐ前の1, 2語を加え、順に後ろから前へと語を加えてゆく。そして最後に文全体を反復させるという方法である。この後ろから積み上げる方法の利点は、(1)慣れた情報が後ろにきた場合学習者は流暢にできたと考える。(2)全体の文を暗唱して反復する際、最初の出だしが理解できれば後は慣れ（記憶）によって容易であることが経験的にも考えられる。

第2期のコグニティブ・アプローチは成人が外国語を修得する場合も、子供が母語を習得するときと同じような過程を経ると考えられ、言語習得は習慣形成ではなく、規則に即した創造性としてみている。すなわち子供は単に大人の言葉を模倣しているのではなく、耳に入ってくる言語を日常生活の中で処理し自分で発見した有限の規則を使って、それまで教えられたこともなく、聞いたこともない新しい文を創造することができる。認知心理学的に言えば、意味を媒介にして

新しい情報を経験と知識に関連づけて理解してゆくと考えられる。この考え方の大前提となっているのがチョムスキーの提唱した「言語習得装置 (LAD)」で、人間には生まれながらにして他の動物にはない人間固有の言語を生み出す能力の仮定である。成人が外国語を修得する場合も経験と知識に基づき仮説を立て、それを検証・修正しながら独自の言語体系 (中間言語) を自分で発見してゆくと考えられる (図2参照)。

このアプローチの特徴は学習者の言語を中間言語として認識することである。例えば日本人英語学習者の中間言語とは完全な日本語の体系でも英語の体系でもなく、それなりに学習者の認知力にあった独自の規則体系を持った言語である。よって学習者の誤りは中間言語であり成長段階の一過程であることから、教師は学習者が自らそれを発見できるように指導することが重要となる。代表的な教授法にガテーニョが提唱したサイレント・ウェイがある。

**図2 チョムスキーの言語習得モデル**  
 言語資料→人間の脳 (言語習得装置)→個別文法 (中間言語)  
 (Input) (LAD) (Output)

これまでどちらかと言えば言語習得はその言語の規則・体系の修得と考えられ、いわゆる文法修得にその理論的焦点がおかれていた。第3期コミュニカティブ・アプローチでは言語運用能力に焦点がおかれ話者が何を意味するかが最大の問題となる。その中でいち早く我々の目を引いたものがクラッシェンの提唱するインプット仮説である。

彼によれば学習者はその言語によって与えられた情報を理解する過程を通して言語習得が行われ、言語の規則・体系はいわば副産物として身につくと考えられる。よって教室において最も大切なことは学習者にとって理解可能な情報入力をできるだけ多く行うことである。その際学習者に心理的な防衛反応を引き起こさせないために、不安の要因となるものは取り除き自信をもたせる指導方法が望まれる。クラッシェンは学習者の心理的な要因を情意フィルターと呼び、これが高くなればせつかくの情報入力が言語習得装置まで達せず言語習得はできないと言っている (図3参照)。代表的な教授法にナチュラル・アプローチ (Krashen and Terrell 1989) がある。

**図3 クラッシェンの言語習得モデル**  
 情意フィルター  
 理解可能な (情報) 入力→人間の脳 (言語習得装置)→言語運用能力  
 (Comprehensible Input) (LAD) (Output)

## 6. まとめ

コミュニケーション能力を伸ばす外国語教育を考える場合、その言語の形式 (構造など) と情報内容 (学習者に何を表現させたいのか) を考慮にいれなければならない。教室でのコミュニケーション活動において豊富な理解可能な情報入力を行い、必要とされる文法規則の修得を助ける指導方法が望まれる。例えば口頭による学習者との質疑応答の方法である。教師が質問し学習者が答えるという短い応答が、簡単で言語的誤りの比較的少ない方法であろう。すなわち教師は情報入力を学習言語で行い、目標とする言語形式を学習者側から引き出すように質問を考案し、フィードバックを与えることによって指導できるからである。

このように教授法の流れを概観してみると、教師中心の授業形態から学習者中心の授業に変化し、最近では学習者個人の心理面を考慮した教授法に移行していることが分かる。最後に外国語を修得するには次の2点が考えられる。まず子供のように自然に習得する方法。もう1点は学校教育などで意図的に文法を学習して修得する方法である。これらのことを考慮にいたした上で我々語学教師はことばを教えてゆかねばならない。

### 参考文献

- アール・W・スティービック 1982. 「外国語の教えかた」— 学習者中心のアプローチ — サイマル出版会  
伊藤克敏 1990. 「こどものことば」— 習得と創造 — 劉草書房  
伊藤喜一 1983. 「英語教授法のすべて」大修館  
石田敏子 1988. 「日本語教授法」大修館  
片山嘉雄 他 1993. 「新・英語科教育の研究」大修館  
木村宗男 (国際交流基金) 1988. 「教授法入門」凡人社  
Krashen, S. D. & Terrell, T. D. 1988. “The Natural Approach” — Language Acquisition in the Classroom —, Prentice Hall.  
Richards J. C. & Rodgers T. S. 1986. “Approaches and Methods in Language Teaching” — A description and analysis —, Cambridge University.